九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

ワーヅワースの「辺境の徒」Borderersについて(中)

前川, 俊一

https://doi.org/10.15017/2332943

出版情報：文學研究. 42, pp.42-66, 1951-11-30. 九州文学会
バージョン：
権利関係：

KYUSHU UNIVERSITY

ワーヅワース「辺境の徒」について（中）

前川俊一

一七八九年七月、バスティーユ獄陥落の報知が届いたとき、ケムブリッヂはすでに休暇に入つてゐて、在学中のワーヅワースは北方に去つてその地にはゐなかつた。バスティーユは、以前から英国でも大陸の圧制政治を象徴する存在として知られてゐた。詩人ウィリアム・クーパーも、一七八五年作の長詩の「課題（タスク）」の中で、あたかも四年後の陥落を予言するかのやうに、この獄に呼びかけて、「御前が遂に落ちたと聞いて、胸躍らせぬ英国人はあるまい」と叫んでゐる位である。

この報知はケムブリッヂ大学内にも相当の反響をまき起したらしい。したがつて九月になつて大学に戻つたワーヅワースも、この事件に幾分の関心を抱いたことと想像されるが、「序曲」の中にはあつさり、「自分の青春にふさはしい程には喜悦を覚えなかつた」とだけいつてゐる。

しかしその翌年の夏休みには、大陸に徒歩旅行を試み、このとき初めてフランスの地を踏み、革命下のフランス民衆の動きを見ることになつた。当時彼の心中には、自然が関心の主位を占め、ために「壮大な形象が青年の想像を魅惑し、破格の望みを叶へしめた」次第で、卒業を間近にひかへてのこの大胆な企ても、まつたくアルプス踏破を目的

としたものであつた。しかしそこには、当時全欧洲の注目の的になつてゐた革命フランスに対する興味も幾分は動いてゐたことであらう。

ワーヅワースと彼の学友ロバート・ヂョウンズが、いよいよ英仏海峡を越えて対岸のカレーについたのは一七九〇年七月十三日で、あたかもバスティーユ獄陥落一周年の前夜にあたり、フランスの全土に亘つて、革命を祝ふ祝典やお祭り騒ぎがにぎやかに進められてゐた。当時フランスは革命初頭の険悪な空気も靜まり、少康を得てゐた時分で、革命の前途は希望に充ち、人類の黄金郷はフランスに始まらんとするかの観があつた。

……'twas a time when Europe was rejoiced,
France standing on the top of golden hours,
And human nature seeming born again.

(それは全欧洲が歓喜し、フランスが赫耀たる時の絶頂に立ち、人生が新しく誕生したかに見えた時であつた。)(1)

彼等はカレー上陸後、ソーヌ河畔のシャロンまで徒歩で南に向つたが、この間彼等の瞥見した、革命をことほぐフランスの民衆の明るい、希望にみちた相貌は両青年の心を強くとらへた。曰く

「ささやかな町で、少数の人々のうちに、一人の喜びが千万の人々の喜びであるとき、それがどんなに明るい顔つきになるかを、我々は見た。それから南に道を取つて、眞直に村々や町々を横切つたが、それらはかの祭典の名残り、凱旋門や窓飾りに残されて色あせようとする花で照り映えてゐた。我々は公道を、また時には苦しい旅程を縮めるため、三日続けて僻村の小道を通つたが、いづこにも博愛と愉悦がかぐはしい香気のやうにひろがつてゐるの

であつた。あたかも春が、国のあらゆる隅々に行き亘るやうに。また、この大王国の堂々たる道路に幾哩に亘つて立並ぶ楡の木は、軽やかな影をなし、不断に道行く我々の身ぢかにあつて、頭上にざわめいてゐたが、かかるとき青春の盛りに、あたり四面にかかる喜びにつつまれ、これらの木々のかそけきゆらぎに、詩人の柔かき憂欝と、悲哀のそこはかとなき想ひをつちかふのはたのしかつた。我々は野宿をしては夕星の下に自由の躍りを見、夜更けに野外の躍りを見た。」

彼等はシャロンで乗船してソーヌ河を下り、バーガンディの葡萄に蔽はれた丘々の間を通つてリオンに出て、そこからローヌ河の支流に入つた。船中には巴里の祝典からの帰途にあつた、恐らくはマルセーユ代表の一団らしいにぎやかな連中が乗込んで来た。

「彼等は蜜蜂のやうに群れた。そして蜜蜂のやうに華やかで陽気であつた。あるものは歓喜に酔ひしれて大言壯語し、小癪な虚空と戦ふかのやうに剣をふりまはした。我々はこの快活な仲間に交つて上陸し、共に夕食を摂つたがまるで天使が昔アブラハムに歓待されたやうな歓待ぶりであつた。夕食を終へると、みちあふれる盃と幸福な想ひに意気あがり、合図をしほに立上つて手に手を取つて環をつくり、食卓をめぐつて躍りまはつた。あらゆる人々の胸襟は開かれ、あらゆる人々の口は友情と歓喜にこだました。我々はフランスで讃めたたへられる英国人の名前を帶びてゐた。そして、輝かしい行程にある彼等の先達として、ねんごろにもてなされた。そして、再び食卓をめぐつて、幾度も幾度も躍り廻るのであつた。」

以上のワーヅワースの回想によつて、彼の受けたフランス革命の初印象がどんなものであつたか、ほぼ見当がつく

であらう。

先きにも述べたやうに、彼等の大陸旅行の目的は勿論アルプスの踏破であつて、革命下のフランス視察は、直接に意図するところではなかつた。また当時までのワーヅワースは、かういふ政治的、社会的な問題には殆んど興味をもつてゐなかつた。

A Stripling, scarcely of household then
Of social life, I look'd upon these things
As from a distance, heard, and saw, and felt,
Was touch'd, but with no intimate concern;

（当時私は、まだ社会生活の一員とは云へない若者で、これらの事象を、いはば距離を置いて眺め、聞き、見、感じ動かされたが、それは親身の関心を抱いてではなかつた。）

しかし、逆に云へば、これらの印象はかういふ思想的に受入れ態勢の出来てゐない、いはば白紙に等しい彼の心に有無を云はせぬ感覚的な経験として、不意にはいり込んで来たがために、却つて彼の精神に、恒久的な、深い影響を及ぼしたと云へる。革命初期に湧き立つてゐた自由、平等、友愛の精神は、先づフランス全土にひろがる、快い感激的な雰囲気として、生涯初めての異国の旅に心躍る若者をつつみ込んだ。ワーヅワースのやうな異常に敏感な心性の人間には、かういつた感覚的経験が一番ものをいふのである。しかも彼は、かういふ革命下の雰囲気を、元々自分の性分に合つたものとして、何の異和感も覚えずに受入れ、その中でのびのびといきづいてゐる。

I seemed to move along them, as a bird pursues
Its sport, or feeds in its proper element

（私はその間を、鳥がその本来のすみ家たる空中を、たはむれに、あるひは漁つてすぎ行く如くに、通りすぎる気がした。）

これは意味深い言葉である。ワーヅワースは当時に至つても、まだ人事に関心を覚えるに至らなかつたが、彼の生れついての性向と、その幼少期からの還境は、フランス革命の目指す社会を、当然さうあるべき社会として、受入れるやうな心性を無意識裡につちかひ育ててゐたのである。

ワーヅワースは小学校時代から、自然の魅力と畏怖感の下に幼い感覚を徐々に目覚まされながら育つて行つたが、その当時から、人間は先づ、彼の常住接するところの山野にあつて默々として働いてゐる羊飼や農夫といふ形をとつて彼の眼前に立ち現れた。

ワーヅワースの幼少時代を過したカムバーランド地方の農夫は、昔英蘇国境地方に戰ひの烈しかつた時分、そこに住みついてゐた一種の屯田兵の子孫であつた。彼等は、一朝事あるときは軍事上の賦役に服することを條件として、ささやかな土地を保有することを許されてゐた。この保有制度は、時代が移つて賦役制度が空文化すると共に絶対的な所有制度へと転化して行つた。かういふ事情で、この地方の農民は、他地方のやうに大地主の圧迫を受けることなく、ささやかながら各自所有の土地を持ち、北国人特有の剛健な気性と相俟つて、独立心の旺盛な「ステイツマン」として残つてゐた。後年ワーヅワースの描くに至つた農夫の性格には、彼の接触したかういふ小農民の性情を写した

ものが少くない。それはワーヅワース自身の口を借りれば、「希望と冒險の生活に、そして土着の人々にいと貴重なあの莊嚴な無為と交錯する烈しい勞働の生活に結びついた自由人」なのであつた。したがつて、幼時ワーヅワースの接した農民には事実その日その日の生活に追はれる、みじめな境遇の農民は少なかつたのであらう。そして彼は、かかる人々に対する尊敬の念をつちかふにあつらへむきに、彼等農夫の煩労の多い、卑賤な生活部面を知らず、一定の距離をへだてて、崇高な自然を背景にして眺める立場に置かれてゐた。そればかりではない。彼はかういふ羊飼や農夫を、視覚的に偉大さの感覚と結びつけて印象づけられる機会を屢々持つたのである。

「遊びあるく小学児童の時分、なぜかは知らず、このやうに彼（羊飼）を見、その本領に住する彼の存在を、領主か主人の如くに感じた。あるひは自然の下、神の下に主宰する力または精神として。嚴しい寂寥は、そこに彼の在るとき、更に威嚴を増すやうに思へた。大鴉の巣をさがしてゐて、俄かに霧に襲はれたとき、あるひは、雨の日に、寂しい小川の畔に釣してゐるとき、ふと数歩かなたの彼に目が留まると、彼は霧の中を、巨人の如き背丈で濶歩し、従ふ小羊はグリーンランド産の熊のやうに見えるのであつた。また時には、日蔭の岬を曲らうとする彼の姿が、落日の強い光輝に輝きわたつて私の眼に閃めいた。また彼を遠くの空に、あらゆる山々をぬきんでる孤独、崇高の物として認めるときもあつた。それはあたかも、シャートルーズのさる尖塔の如き岩の上に、礼拝のために立てられた空中の十字架のやうであつた。」

彼は幼時のかういふ神秘的な感覚的経験に導かれながら、野山に働く羊飼農夫の連中を、純化し、理想化して眺めかくして知らず知らずのうちに、人間そのものに対する尊敬の念をつちかつて行つたのである。

Man did at the first present themselves
Before my untaught eyes thus purified,
Remov'd, and at a distance that was fit.

（人間は当初私の教へられざる眼のまへに、かく純化され、へだてられ、適当の距離を置いて現はれた。）

ワーヅワースはまた、幼時から少年時代を通じて、「少年であると大人であるとを問はず、財産とか、血筋とかのために大切にされたり、うやまはれたりする人間を殆んど一人として見たことがなかつた」と語つてゐる。またケムブリッヂで見出したものも、「あらゆる人間が平等の立場に立ち、一個の共同社会に於ける如く、学徒も紳士も名誉の点では同胞関係にあり、のみならず栄誉はここに来るすべての人士に開放され、富と爵位よりも才能と、成果をもたらす勤勉が尊敬される共和的社会」を見出した。かくして、ワーヅワースの幼時から知らず知らずの間に形成され来つた人間観は、おのづからフランス革命の目指す理想を指し示してゐた。彼が人類はじまつて以来とも云ふべき大事件の進行中の土地をはじめて踏んでも、「鳥がその本来の住み家たる空中を、たわむれに、あるひは食を漁つてすぎ行く如く」通り抜けて怪しまず、また革命勃発の当初「我が青春にふさはしいと考へられる程度に喜びを感じなかつた」のも、今のやうな事情で、彼には「その事件が自然の確かな道程をいささかも外れたものでなく、来ることむしろ遅きに失した賜物」のやうに思へた結果なのである。

さてここで、今一度彼の大陸旅行当時の印象に立戻つて、それと彼の幼時に受けた神秘的な感覚的経験との間の類縁性について考へて見たい。シー・エイチ・ハーフォドは、「幼時からさうであつたが、ワーヅワースの心は筋肉や

神経が緊張してゐるときに、最も豊かで、最も恒久的な印象を受けた[2]」と述べ、此の旅行中、「軍隊のスピードのやうな行進ぶりで」アルプス地方を通過したときの匆卒の印象が彼の脳裡に久しく沈潜し、それが後年の「序曲」の中の意味深い章句となつて現れてゐることを指摘してゐる。しかしこの見解は、今考察して来たところの、彼がフランスの国土を通過した際の印象にも延長して適用することが出来るやうに思はれる。ワーヅワースとヂョウンズの両人は上陸後、前述のカレー、シャロン間の三百五十余哩の距離を、丁度二週間――即ち一日に廿五哩のスピード――で踏破してゐるのである。尚、彼が幼時「適当な距離をへだてて」羊飼や農夫を見たために、その姿が純化されて映つたと同様に、革命下のフランス民衆についての最初の印象も、かういふスピーディーな旅行の途中で、外国人の眼といふ、そして恐らくは言語の不通といふ距離を置いて受取られたがために、純化され、理想化されてワーヅワースの心眼に映つたことであらう。ワーヅワースにあつては、かういつた、意識的に関心の対象にしなかつた、しかし強烈で純粋に感覚的な印象が、久しく彼の脳裡にとどまつて、後年の意味深い想像的な経験に転化して行くのである。この意味で、ワーヅワースのフランス革命に対する後年の傾倒の土台は、この最初の、むしろ無意識な、瞥見的な印象のうちに用意されてゐたと云つてよからう。

ワーヅワースはケムブリッヂを去つてから、一七九一年冬にフランスに渡航することになつた。これは「序曲」の一八〇五――六年稿によれば、フランス語の修得を目的とするものであつた。但しこの場合も前年に通過した際の革命下フランスの好ましい印象が、背後の大きな誘引力となつたことは当然想像される。

もつとも当時にあつても、彼の関心は依然として人事にはなかつた。それは彼がフランス革命についての何等の予

備知識をも持たないで、卒然渡航してゐることからでも察せられる。したがつて、革命の現地に足を踏入れても、刻下の革命の様相はさつぱり見当がつかなかつた。

I was unprepared
With needful knowledge, had abruptly pass'd
Into a theatre, of which the stage
Was busy with an action far advanced.

（私は必要な知識を用意せず、ひよつくり劇場に入つたが、舞台ではお芝居の筋がはるかに進んで、熱演中であつた。）

彼は巴里に四日滞在した後、南仏のオルレアンに赴いた。ここで彼が早速ブロワ生れのアネットと深い仲になつたことは周知の通りである。彼がオルレアンからしばらくブロワに移り住んでゐるのもその関係からであらうと云はれる。ここで彼は、どういふ伝手によつてか、ひそかに旧帝政に同情を寄せてゐる一群のフランス将校と知り合ひ、時折彼等と議論を交へるやうになつたが、そのうち、この仲間の中で只一人革命に味方してゐるミシエル・ボーピュイといふ年上の將校と親しい間柄になつた。この將校は、革命運動の背景となつたモンテスキュー、ルソー等の社会哲学に通暁し、遠くモンテーニュの血を引く古い門閥の出であつたが、デモクラティツクな思想の人間で、人道主義的な立場から革命運動に熾烈な共鳴を寄せてゐた。この私心のない、温和で、そして情熱的な人格は、先づ若いワーズワースの心を捕へた。そして彼はこの人物を通じて、はじめて組織的な哲学と革命の原理を学び知り、革命に対する

当初の漠然たる好意が、理論的な基礎を持つた、熾烈な共鳴へと転化して行つたのである。

ワーヅワースの語る、ボーピュイとの談論の思出のうち、もつとも感銘深いものは、彼等が路上で出逢つた一少女についての次の挿話である。彼等はある日、若い牝牛に道々食物を拾はせながら、自分はせつせと編物をしてあるいて行く、餓えて痩せ衰へた少女に出逢つた。これを見たボーピュイは興奮して、「我々が闘つてゐるのはああいふ事柄をなくさうためだ」と叫んだといふのである。

「私は彼と共に衷心から信じた。あらがひ得ない精神が澎湃としてゐることを。少くともかくの如き貧困がぢきに消えうせ、勤勉なる者、労苦する身分卑しき子にむくいんとする大地の願ひがかなへられることを。独占を法制化する凡ゆる制度は抹消し去られ、空しき豪奢と、一者乃至少数者による貪慾なる国家と残酷なる力は一掃されることを。そして一切のしめくくりとして、人民が彼等自身の法律を作る強き腕を持つ日がおとづれ、かくして人類のすべてによりよき日の来ることを。」

ワーヅワースの当時抱いてゐた革命思想は極めて進歩的なものであり、また革命の近い将来の成果に対する期待は恐ろしく楽観的なものであつた。また、ワーヅワースをして、かくも革命思想に異常な情熱をそそがしめるに至つた根本の推進力は、人道主義的道義感であつた。事実彼はこの挿話にうかがはれるやうな弱者に対する深い同情を、その後のワーヅワースの全生涯を通じて――彼の革命に対する情熱がさめはてた遙か後までも――保持しつづけたのである。そして後年の彼の幾多の詩篇を支へる倫理的支柱となつた。

かくして、ワーヅワースのフランス革命観は、ボーピュイによつて決定的な影響を受けたのであるが、それはある

意味では、これまで檢討して来たやうに、幼時から心中に知らず知らずのうちに形成されて来た彼の人間觀の深化であり、ことには先きのアルプス旅行の途次に得たフランス革命の初印象の理論的裏付けであつたと云へるであらう。それは人間の尊嚴感を基底にしたデモクラティツクな人間觀の当然たどりつくべき結論であつた。また、彼は在学中の大陸旅行中、革命の様相について、極めて明るい印象を受取つたが、一年間に亘る彼のフランス滞在期間中、彼のかういふ明るい展望を裏切るやうな革命の局面は大体に於て現はれなかつたと云つてよからう。もつとも、彼の南仏滞在中に、有名な九月虐殺事件が起つてゐる。これは一七九二年九月二日から四日まで三日に亘つてパリに起つた騒擾事件である。当時巴里に結成されてゐたコミューヌは、義勇軍の国境向けの進発をまへにして、「外敵に向つて進軍するのに、その妻子を殺害するおそれのある悪徒を後に残さないやう」王党の陰謀派を捕へて処刑しようとしたのであるが、群衆心理の赴くところ、遂に常規を逸し、王党には何の関係もない窃盗犯や懲役人、果ては女子供を收容した養老院や感化院までも襲撃して、一千余人を殺戮するに至つた。後年の恐怖政治への徴候がすでにこのうちに認められる。ワーヅワースはこの事件が起つてから僅か一ケ月後に巴里を訪れ、事件の跡をたづね、そのとき巴里の旅亭に過した一夜の無気味な感慨を「序曲」のうちに述べてゐる。後年の恐怖政治に対する彼の反感の萠芽はすでにこの時に蒔かれてゐるのである。しかし、当時では彼はこの事件を、「一度きりしか姿を見せぬ短命の怪物」と看做し依然として樂觀的な見方をしてゐる。彼は当時漸く苛烈さを加へようとしてゐたジャコバン党とジロンド党の党爭には、温健なジロンド派に同情を寄せてゐる。そして九月虐殺の責任者として單身ロベスピエールの紀彈に立上つたルーヴェの勇気をほめる口吻をもらし、それが一般の支持を得ず、却つてロベスピエール側の強化に終つてゐることを

なげいてゐる。しかしながらそのあと語を次いで、全世界の人々が「自由にふさはしい理性の忍耐強い行使」によつて、また眞理の聖なる光が人々の心に充ちあふれることによつて、フランス一国ではなし得ないことがなしとげられることを期待してゐたと述べてゐる。要するに当時の彼は、フランス革命の途上に於ける個々の出来事よりも、その底を流れ、それを推進する高遠な理念と崇高な情熱とに信頼を寄せ、途上に幾分の害悪は現はれようとも、大勢は当初の大理想に向つて動いてゐると信じて疑はなかつた。

彼はそれからぢきに本国からの送金が絶えたため、「苛酷な必要にせまられて」英国に帰還することになつた。これは彼自身の述懐によれば全く幸運の出来事であつて、若しあのとき滞在が長びいてゐたら、

「私は無名の、卑しい、つまらぬ一異邦人で、自国語ですら弁舌の才を缺き、騒乱や陰謀には全く不向きな人間ではあつたが、如何に危険であらうと、かくの如き大義のためとあらば、当時私は喜んで一役買つて出たことであらう。」

と述べてゐる。さて彼はボーピュイと「平和国家の目的とその最賢明なる形体」について熱心に語り合つてゐた頃のことに触れて、

「当時擾乱に殆んど足を踏入れてゐなかつたこととて、後年よりも健全な判断を下し得た。」

と云つてゐる。これは、そのあと彼自身渦中に飛込んだことを暗示してゐるやうにも取れる。ワーヅワースは在仏当時どの程度に実行運動に入りこんでゐたのであらうか。彼は一七九二年五月十七日にブロワから本国の旧友ウィリアム・マシューズに宛てて書いた手紙の中で、次のやうなことを言つてゐる。「革命の嵐にゆれてゐる国からの手紙

ですから、小生の手紙が單に我々や我々の友人だけのことに限るまいと想像なさるのは御尤もです。しかし実を申しますと、フランスの一般事情につきましては、王国の眞中の一小田舎都市よりもロンドンにゐた方が、ニューズを得る機会に惠まれてゐます。貴方よりも報道の便に惠まれてゐるのは（ロワール・エ・シェール）縣公報位のものでせう。……。」[3]この書きぶりから見ても、ワーヅワースが特に何等かの政治団体に加入して、普通人よりは政治上の情報に通じてゐたらしくは思へない。

彼が英国帰還前に巴里に来たとき、小説家シャーロット・スミスから、時のヂロンド党の首領ブリソに宛てた紹介狀を持参してゐたといふ。[4]彼がこの際巴里の旅宿で、「序曲」に記されてゐるやうな暗い予感を感じたとすれば、それにはかういふヂロンド党の人々との交際から、將来の情勢について多少の見透しがついてゐたことが原因してゐるかも知れない。いづれにしても、この前後、ワーヅワースにヂロンド党に属する人々との間に多少の交遊関係のあつたことは想像される。

ワーヅワースには、非常に衝動的、情熱的な一面があり、その考へもある期間には非常に急進的であつた。しかしその反面、ルグイも指摘してゐるやうに、[5]実際行動については非常に要心深いところがあつた。もつともアネットとの一件の如きはその反証とも考へられるが、これは僅か廿才そこそこの世間知らずの身で、異国の、しかも革命騒ぎで平素の道德習慣も動揺してゐる社会に、いきなり飛込んだために仕出かした若気の過ちと見るべきものであらう。英仏国交断絶の事情もありとは云へ、両人の間に子まで出来ながら、はたから見ればむしろ優柔不断とも思へるやうな態度に出てゐるところに、却つてワーヅワースの性格がうかがはれる。帰国後、ランダッフの監督ウォトスンが、

フランス革命を非難するパンフレットを出したのに憤激して書いた監督宛の手紙なども、内容は随分激烈なものではあるが、彼の筐底にしまはれた儘で生前には公開されずに終つてゐる。それは監督自身のところへすら送られなかつたらしい。

以上のやうな種々の事情を考へ合はせると、彼の革命に対する態度は、いはばインテリのシンパ程度のものを出でなかつたやうに思はれる。そこには終始外国人としての一定の距離感がつきまとひ、思想自体は如何に急進的であらうと、それは実践的意慾とは結びついてゐなかつた。彼は革命の現実の相に注意深い眼を向けるよりも、頭から原理的にそれを肯定してかかり、革命を詩人的に理想化し、美化して考へる傾きが強かつた。彼が革命の情勢に対する冷厳な観察眼を働かせるたちの人間であるか、それとも革命の渦中に飛込んで、人間の意慾と利害の衝突を身を以て体験する底の人であつたならば、「辺境の徒」の内容も恐らく今日見る如きものとは趣を異にしてゐたであらう。

ワーヅワースは一七九二年冬、完全に共和主義者になつて英国へ帰つて来た。しかし英国の輿論は、ルイ十六世の処刑を機として急激に変化し、二月はじめには遂に英仏間に宣戦が布告された。このとき、ワーヅワースが生涯にはじめてとも云ふべき精神的衝撃をうけ、祖国愛と己れの思想との相剋に悩んだことは、「序曲」の中に詳しく記してゐる。この間にあつて、彼のフランス革命に対する信念にはいささかの動揺もなかつたが、革命の現実の事態は次第に彼の楽観的な期待を裏切る方向に進んで行つた。即ち、国王の処刑以来、ヂロンド党と山岳党との軋轢は次第に烈しさを加へ、遂に一七九三年五月卅一日のヂロンド党の没落となり、恐怖政治の幕は切つて落された。ところでワーヅワースはこの恐怖政治がいよいよ本格化したその年の九月にひそかにフランスに渡航してゐるらしいのである。目

的は恐らくブロワに赴いてアネットに逢ふことであつたらう。カーライルが回顧録に記してゐるところによると、ワーヅワースはこの時、ヂロンド党の領袖ゴーサが十月七日処刑されるのを目撃したといふ。カーライルは云ふ、「ワーヅワースは革命の初期乃至第二期当時パリーにゐて、ヂロンド党と山岳党の抗争、ことに「処刑台に送られた最初の代議員」ゴーサの処刑を目撃し、この事件が万人の心中に引き起した不吉な感情を目のあたりに見た。そして彼自身いまなほその感情の幾分をたもつてゐるらしく見受けられた。「こんなたちの先例を作つては、あととめどがあるまい」といふ感じである。ゴーサのことは余もよく知つてゐた。しかし余の目を通したものの中では、彼の死がよび起した公衆の感情のあとかたを見出さなかつた。それでこの一些事について、余の著（フランス革命史）の眞の補遺にワーヅワースを挙げてよからうと考へたのである。[6]」ワーヅワースが帰国の直前、僅か一ケ月前に九月虐殺のあつたばかりの巴里に一夜を明かしたときの感慨を「序曲」の中に記してゐることは先きにも触れたが、実はここにはそれから一年後の秘密渡航時に巴里にあつて覚えた気持が移し入れられてゐるやうに思はれる。それは、九月虐殺事件を「一度きりしか姿を見せぬ、短命の怪物」とあつさり考へてゐた九二年九月当時の気持よりも、ゴーサの処刑を目撃して、「こんな先例を作つては、あととめどがあるまい」と不吉な予感にをののき、またヂロンド党の同情者として、潜入中の敵国人として、身辺に危険を感じてゐた九三年十月の感慨に遙かに近いのである。

「過ぎ去つた恐怖は、来らんとする恐怖のやうに私にせまつた。……私は全市に向つて、「眠りはもうない」と叫ぶ声を聞いたと思つた。心を落付けて自分に云ひきかしても充分の安心は得られなかつた。どう考へてもここ（巴里の旅舎）は夜を安らかに過すにはふさはしからぬ、虎の徘徊する森のやうに無防備な、恐ろしい場所としか思へ

なかつた。」

いづれにしても、彼が三回目のフランス渡航に於て見出したフランスの雰囲気は、アルプス踏破旅行当時の、あの洋々とした、四海兄弟的な明るい空気とはおよそ似もつかぬ、凄惨な、そして危険きはまるものであつたらう。彼がこの時危険を冒してブロワに到着して、アネットと再会出来たかどうかは明らかでない。ハーパーは、彼はヂロンド党の同情者として、また敵国人としての危険感のため、ブロワ到着にあきらめをつけて英国に引返したと推測してゐる。

彼は「序曲」の中で、フランスが恐怖政治下に入つた長い期間に亘り、日夜陰欝でみじめな日を送つたと語つてゐる。

「私は殆んど一晩も安眠を得なかつた。私は絶望と暴政と死刑執行の恐ろしい幻影を見たり、夢の中で不正な法廷で長々と弁疏をするのであつた。舌はもつれ、頭脳は混乱し、また自分の知る最聖所——自分の心中に、裏切りと義務放棄の意識をいだきながら。」

この一節を、先きの秘密渡航の一件を背景にして読むと、恐怖政治下のフランスで受けた印象が、彼に如何に強いショツクを与へたか想像出来る。

しかし、この時期に及んでも彼は革命の前途に望みをつないでゐて、恐怖政治も末期に近づいた九四年七月廿七日にロベスピエールが失脚したといふ報知を耳にして狂喜し、以後革命が正しい道に立かへることに大きな期待をよせてゐる。(7) 彼が革命フランスの指導者等の取つた方策に深い失望を感じながらも、この頃まで革命の前途に望みをつない

で来たのは、彼が己れの目を以てたしかめたフランスの民衆にゆるぎない信頼を寄せてゐたからであつた。

「私の信頼は民衆に、そして私の眼で見た諸徳にあつた。そして事物が窮極の安らひを得ることに、相変らず確信をもつて期待をつないでゐた。」

しかし、彼はこの頃から（九四年八月）翌年の春頃にかけて、遂にかかる窮極の信頼をも喪失するに至つたらしい。そしてそれはワーヅワース自身の語るところによれば、フランス革命政府が隣国侵略政策をとるやうになつたからであつた。

革命の初期には、フランスは王制に味方せんとする独墺連合軍による占領の危機に見舞はれてゐたが、一七九二年九月廿日のヴァルミー丘の勝利を第一歩として、フランス革命軍は着々外国軍を撃退して行つた。ところが一七九四年の末頃からフランスは食糧饑饉に襲はれ、これまで維持して来た軍隊を解散するかどうかの瀬戸際に立たされた。それで国外の物資で軍隊を賄はんがため、外国に於ける革命運動の援助を口実として、スペイン、イタリー、オランダ、更にはドイツにまで侵入を開始するに至つた。ここに於てワーヅワースも、フランス革命政府は当初掲げてゐた自由、平等、友愛の理想を放棄して「侵略者」と化し去つたものと認めざるを得なくなり、革命に対して深刻な幻滅を覚えるやうになつた。

「いまやフランス人等は、かはつて侵略者となり、今まで闘ひ取らうとして来た一切に眼を閉ぢて、防禦の戰ひを征服のそれに替へた。全世界の環視のうちに、自由の秤皿は公然と高くあがつた。」

これはワーヅワースにとつては、先きの英仏宣戰布告当時にまさる、まさに生涯最大の危機であつた。彼はこの時

までの自分の人間観を回顧して

「私は、他の青年達同様に、人間性といふ楯に、その輝かしい半面から近づき、自分の見た金属の質を証拠立てんがためには死をも辞せざる意気込みであつた。」

と云つてゐる。

人間の尊厳さが身分を超越して、あらゆる人々に内在すること、人間の本性は善なること、人間は自由をかち得ることによつてあらゆる悪から脱し得ること、これらは彼の幼時からの経験と彼の育てられて来た時代思潮に導かれて彼の精神のうちに自ら形成され来つた、いはば彼の思想の核とも云ふべき信念であつた。ところがフランス革命の現実の歩みは、この確信をまんまと裏切るに至つた。ワーヅワースはこのとき、足下の大地の崩れ去るやうな驚きと不安を覚えたであらう。彼はフランス革命の経過のうちに認められる人間心理の動きの怪奇さに眼を見張つたことであらう。彼はこのとき、はじめて、今までのやうな楽観的な見方をあらためて、新しいまなこで革命の辿つた道を見直し、人間の本性について再考する必要にせまられた。そしてここで彼の解かうとしたものは、あのやうに人道主義的な公明な動機に発した革命運動をして、あのやうに非人間的な殺戮行為に終らしめた人間心理の奇怪な矛盾であつた。革命の経過にてらして人間性の謎を解かうといふのである。「人間性質の研究は、人生が我々に蒙らせる試錬に於て罪と犯行はよく、全く正反対の性質から発し、かかる犯罪がその奴隷を導いていたらしめる心の冷酷化、理知の歪曲には限度がないといふ、恐るべき眞理を暗示する。私のフランスに於ける長期滞在中、革命は急激にその邪悪の極点にまで進行しつつあつた。私はかういふ経過の目撃者たるの機会をしばしば持つた。そして「辺境の徒」の悲劇が執

筆されたのは、さういふ知識がまだ私の記憶に生々しい間に於てであつた」[8]とワーヅワースが言つてゐるのはこの推測を裏書してゐる。

それでは、この劇は、革命心理の解剖として果してどの程度に成功してゐるであらうか。アーネスト・ド・セリンコートは例のワーヅワースの解説を引用しつつ、この劇の意図とフランス革命との関係を説明して、「彼がこの劇を執筆すべく促がされたのは、革命を災禍に終らしめたタイプの性格――オズワルドのやうに、自分自身の烈しい憎悪を満足せしめんがために、その勢力を利用し、また因襲的な道徳に対するシニカルな軽蔑をいだいて、己れの悪辣な行為を正当化せんがために自分独自の哲学を打立て、そのため眞理すらも自分の手中で悪の道具と化し去る底の人々更に次の段階にあつては、マーマデュークのやうに、公的義務の感情を弄ぶことによつて、自分自身が嫌悪を覚えるやうな罪を犯させられた人々――を、ワーズワース自身の経験に照らして、解剖し、出来ればそれを説明したいといふ願望によつてであつた」[9]と言つてゐる。

フランス革命は、非常に複雑な、そして多方面にわたる大事件であつて、その解明には、当時のフランスの政治的経済的、社会的狀勢についての適確な判断と、広汎な視野とが必要であらう。ことにそのテロリズム化への経過の理解については外に人間心理についての深い洞察を必要とするであらう。人の集合するところ、一種の粗雑な正義感と軽々しく他人の言を信じ易い気持と、感情をすぐに行動に移したがる衝動とが混合し合つた一種の異常な雰囲気が醸成される。かういふ雰囲気は、フランス革命の置かれたやうな、過去の権威と秩序が崩壞し去つて、無秩序無統制な社会には特に強く発現する。それはデマゴーグの活動にはよい温床である。かういふ人々の煽動にあやつられて、群

衆は、冷靜な立場にあつては考へられもしないやうな大胆で思ひ切つたことをなしとげる。しかもかういふ動きの上に乘る人々、それを指導する人々も、その內心に民衆の正義感を利用してやらうといふ利己的な動機が、意識裡にかあるいは意識下に動いてはゐるであらうが、それが己れの內心の正義感や、公衆のための献身感とわかち難く結びついてゐる点にむづかしさがある。またかういふ意味の自己肯定感がなければ、彼等と云へどもあれ程の自信を以て民衆を支配することもないであらうし、また民衆もあれ程に指導者の魔力にひきずられないであらう。そしてフランス革命の変質化の心理的秘密は、フランス革命を推進する立場に立つた人々が、ああいふ烈しい社会的動揺と無秩序との只中にあつて、自分等の抱く理想を現実のうちに強引に推進しようと努力するうち、主義理想のまへに一切の因襲道德、義理人情を無視してかからうといふ不自然な試みが、それと意識しないうちに、群衆心理といふ形をとつた感情の叛逆に逢ひ、原始的な本能——「血に渴ける神々」——の手先となつて躍るところにあるのではなからうか。この点、アナトール・フランスの「神々は渴く」の主人公エヴァリスト・ガムランの如き、渦中の人間の心理をよく洞察し、解剖して描かれてゐると思はれる。ところが「辺境の徒」を革命心理の解釈として見るとき、かういふ意味の群衆心理、集団的な人間の動きの機微が全然とらへられてゐない点に先づ不満が感じられる。このうちに現はれる人物は、オズワルドにしても、マーマデュークにしても、集団的な働きに乘る人物としては余りに個人的なのである。

もつとも、ワーヅワースも、フランス革命の如き複雜広大な事件を、正面からあつかふことの不利なことは知つてゐたらしい。彼はこの劇に於て、フランス革命に相応するやうな、しかしより單純な條件を設定する。曰く、「行動の場面と時代については、既存の法律秩序の缺如以外のものは、自分の目的達成のためには殆んど何もいらなかつた。」(10)

かうして彼はフランスの政治、社会的狀態と云つたものを捨象し去つた世界を設定して、問題を單純化してゐる。あるものは只「各人が己れのために設ける以外の如何なる法律をも認めない」[11]無秩序の社会である。そこまではよいが、彼は次にかういふ條件の下に起る行動から、集団的なものを除外し去つてゐる。そこでは、さういふ無秩序の社会に於ける人間の集団のかもし出す有機的な関係と雰囲気が全然視野にはいつて来ない。劇中の各性格は、各性格の個々人としての相対的な関係に於て触れ合ふにすぎない。ワーヅワースもいふ、「私の注意は殆んど專ら感情と性格と、そして劇中の各性格が相対的に互ひに立つてゐる関係に集中された。読者がそれによつて（当時私は上演は考へてゐなかつた）動かされ、吾人の性情の奥底にいり込んだ光によつて、ある程度敎へられるやうにとである」[12]と。劇中のオズワルドは革命に躍る人物の象徴としては孤高にすぎる。マーマデュークを陷れようとする動機もあまりに個人的、意識的であり、またかかる企てを推進する一要因としての彼の哲学も自己中心的で奇矯にすぎる。そこにはデマゴーグ的色彩が非常に稀薄なのである。またマーマデュークの行動も革命の舞台にかつぎ上げられ躍らされる善人のそれとしては、どうも人を納得させる條理を缺いてゐる。

こんな訳で、革命に即して人間心理の暗黑面を突いた劇としては、これは失敗の作品とならざるを得なかつた。彼は「私の滯在中……革命は急激にその邪悪の極点にまで進行しつつあり、私はかかる経過の目撃者たるの機会を屢々持つた」とのべてゐるが、これは事実を誇張して言つてゐるにすぎない。彼が恐怖政治の邪悪の極点に達しようとしてゐる時分の雰囲気を短期間ながら呼吸したらしいことは先にも述べた。しかし彼はさういふ経過の一貫した観察者でもなく、また己れの受けた個々の印象を綜合して、それに一貫した内面的解釈を加へるだけの力もなかつた。それ

は彼の扱ふ題材があまりに己れに身近であつたこと、彼が当時いまだ一介の青年で充分な人生体験を積んでゐなかつたこと、等々幾多の原因が考へられるが、根本的には詩人としてのワーヅワースの素質がかういふ政治的、社会的動きに関係した複雑な人間心理を扱ふに適当してゐなかつたことが挙げられるであらう。

しかし、ワーヅワースがかういふたちの劇を書くに至つた目的は、実はフランス革命心理そのものの解明といふよりは、フランス革命を機縁として曝露された人間心理の矛盾の解明にあつた。そして彼はこの矛盾を、己れの従来把持し来つた人間観への重大な挑戦として受取つた。否、彼は、後で詳述するやうに、この心理の矛盾をただちに己れ自身の心理の矛盾として痛感し、その解決をせまられてゐたのである。

それではワーヅワースはかういふ矛盾を解く手がかりとして、外にどういふ経験を、この劇の中に投入してゐるかといふと、一つはシェイクスピアの劇の教へる心理解剖であり、他は勿論ワーヅワース自身の内面的な個人的体験であつたと考へられる。「オセロウ」がワーヅワースのこの劇のテーマや構成に大きな影響を与へてゐることは先きに述べた。革命心理を「辺境の徒」の内容に転化させるための有力な触媒となつた今一つのシェイクスピア劇は恐らく「マクベス」であらう。一体ワーヅワースは、フランス革命の恐怖政治化の心理的解釈への鍵として、「マクベス」を常に念頭に浮べてゐたらしい。先きにワーヅワースがゴーサの処刑を目撃した事実についてのカーライルの回想録の一節を引用したが、そのときにワーヅワースが当時の一般民衆の感じた気持として受取つたものは「こんなたちの先例を作つては、あととめどがあるまい」といふ感じであつた。そしてワーヅワースは、先きにも一言したやうにそのときの自分の感慨を、約一年まへ巴里で過した一夜の感想のうちに移入してゐるらしいのであるが、そのときに

彼の感じ取つた、將来に対する何とも云へぬ暗い予感を、彼は幻聽「眠りはもうない」といふ一語に結晶させてゐる。この言葉は云ふまでもなく、王ダンカン弑逆後にマクベスのもらす言葉である。明らかにワーヅワースは恐怖政治の進展による流血の惨の極端化を「マクベス」になぞらへて想像してゐるのである。更に、これはフランス革命自体に就て言つたわけでないが、一七九四年十一月七日附でウィリアム・マシューズ宛に出した手紙の中で、当時反動的な抑圧政治に向ひつつあつた英国政府の政策に触れて、それを非難したあと、「彼等は非行に深入りしすぎてゐるのでマクベスのやうに、もう引返すことが出来ないのだ」[31]と云つてゐる。これは「マクベス」の心理解剖がワーヅワースの政治観に如何に深く滲透してゐるかを見るによい参考になるであらう。さて、「辺境の徒」のオズワルドについては、近時セリンコートによつて発見されたワーヅワースの解説が詳細な心理解剖を試みてゐることは先きにのべた。先づその冒頭に主人公（劇のオズワルドにあたる）を紹介して曰く、「非常に知力がすぐれてゐるが、眞正の慈悲心の確乎たる原理を缺いた若者を想像しよう。彼の支配的な熱情は誇りと栄達慾である。彼は動乱の時代の冒險心を深く吸ひ込んでゐる。彼は世間に出て、詐られて大罪を犯す。――彼の幸福のすべてがその上に築かれてゐる声望がたちまちにして地に落ちる。彼の才能は人の推重を失ひ、彼の勢力は無効に帰する。」吾人はこの主人公の敍述のうちに多分にマクベス的な性格と経歴を感じとる。主人公オズワルドが劇中で大罪を犯すのは、マクベスとは全く違つた原因によるのであるが、マクベスもまた魔女共にある意味で詐られて大罪を犯すことになる。これは恐らく偶然の一致ではあるまい。解説には更にこの主人公が、この罪の意識に悩まされて、却つて罪の泥沼にいよいよはまり込んで行く心理の経過を語つてゐる。曰く、「かういふ病的な心の狀態にあつては、彼は何かにたづさはつてゐなければ生き

てゐられない。彼は不断の刺激を求める。彼のあらゆる快楽は将来に関するものである。彼は絶えず幻影を呼び起す。彼は過去の記憶を追ひ払はんがために新しい罪を犯す。しかし彼の苦痛を和げるものは二つ、冥想と行動とである。随つて彼の理性は殆んど専ら、彼の過去の非行を正当化し、新しい非行を犯すことを可能ならしめんがために用ひられる。彼は不断に自己を詐り、あらゆる罪に詭弁的口実を設ける。思想のおだやかな流出、人間理性の甘き乳は彼の関知せざるところである。」この辺ワーヅワースは明らかにマクベスを念頭に浮べつつそのヴァリエーションとしての主人公を描いてゐる。人間理性の甘き乳 'the milk of human reason' は勿論 'milk of human kindness' (Mach. I. V. 18) の余響であらう。もつともこの最後に引用した解説に当る心理は、劇中のオズワルド像には明瞭にあらはれない。それは曾つて自分が詐られて犯した罪を、他人のマーマデュークに繰返させるといふ形式をとつて、解説の場合よりもおだやかな——罪の繰返しへの誘惑といふ点では——心理経過としてあらはれる。したがつて窮極的に劇そのものの中に現れるオズワルド像には、マクベス的なものは殆んど認められない。これはワーヅワースの作劇術が拙劣であつたために、かういふ心理経過が劇のうちに盛りきれなかつたと考へられる。しかしいづれにしても、フランス革命心理の動態は「マクベス」及び「オセロウ」を媒介として、集団心理的なものから個人心理的なものに置きかへられて行つてゐることがこれでわかると思ふ。そして、さういふ方向を取つてゐるところにワーヅワースの心性の特徴があらはれてゐる。彼の観点は常に個人的、そして自己中心的なのである。

次にこの劇の中に、ワーヅワースの個人的な内面的体験はどんな風な反映を見せてゐるか。セリンコートはこの劇を評して、革命に躍る性格を「ワーヅワース自身の経験に照らして」解剖し、また説明しようとしたと述べてゐる

が、それはどういふ意味に於てであらうか、次にそれを考へて見たい。

註

(1) 以下「序曲」からの引用は、すべてセリンコート編「序曲」一八〇五—六年稿によるものと承知されたい。尙「序曲」からの引用はあまりに多いので出所は一々書き記さなかつた。

(2) C. H. Herford: Wordsworth (1930) p. 30

(3) Early Letters of W. & D. Wordsworth ed. by E. de Selincourt (O. U. P.) p. 76

(4) H. I. Fausset: Lost Leader (1933) p. 115

(5) Émile Legouis: W. Wordsworth and Annette Vallon p. 34～5

(6) T. Carlyle's words quoted in H. Read: Wordsworth (1930) pp. 115～6

(7) Prelude (1805～6) X. 536～567

(8) Note to "The Borderers" appended to the edition of 1842

(9) The Nineteenth Century and After DXCVII, Nov. 1926, "The Hitherto Unpublished Preface to Wordsworth's "Borderers"

(10) Fenwick note to "Borderers"

(11) "The Borderers" ll. 595～7

(12) Fenwick note to "Borderers"

(13) Early Letters of W. & D. Wordsworth p. 127